

懐旧・故郷二見ヶ浦二ツ岩

坂本 榮

紺碧の空澄み渡り

群青の海深くエメラルドグリーンに澄み、

若き日・磯では雲丹の方言、ガゼを海で洗い、

尻高貝、ナガラミ貝、方言でナンコウを取り空き缶で茹で、巻貝の肉を楊枝で刺し濃緑の内蔵、クソを取り出すクソの旨さ未だ忘れず

松は緑に、砂は白く、さざ波寄せて

潮騒聞こゆ

その潮騒をよう揺らん籠に成長す

その昔伊勢めおと夫婦岩の如くしめなわ注連縄かけた二ツ岩二見浦からみだれ髪舞台塩屋岬へ弓状の長い水平線二見浦から岬下豊間まで塩場一丁目、その昔、塩垂れしたが故

岩城太夫と盲しい老母、安寿と厨子王、母から聞いた中世ロマン

未だ耳に残る母の子守唄

安寿恋しやホーイホーイ、厨子王恋しやホーイホーイ

その昔、赤松続く我が故郷

防砂林の中、営林署保養寮あり、夏の海水浴客で賑わい、近隣隣組対象の結婚小披露宴なども挙行さる

元結核・回春院は今国立いわき病院に名を変える

二十四年東北地方襲った爆弾低気圧で二見浦二ツ岩の菜切り包丁型の大岩の上部

三分一切断、人類歴史を超え、地球規模の災害の記憶

二十一年、太平洋の遙か彼方で発生せし

大地震

マグニチュード九、人智を超えた震度七、東日本大地震で大岩は壊滅し、ついに消滅に至りぬ

その波頭は白い爪を研ぎ、悪魔となりて防波堤を、浪避けブロックを乗り越え、海岸の家々を

人々を飲み込み、防風林のなか国立病院の車を押し出し我が家、敷地に積む、

我家の勝手口から水が入り、ランドピアノを押し流し、母自慢の総檜造りの柱の玄関框だけを残し二階もろとも押し潰す、

隣地、次男治療院も押し潰す

浪に追われるように母と家族四名、危機一髪逃げ伸び、高台の長女の家避難し全員無事だったのが不幸中の幸い

地面も海水が洗い復旧の見込み立たず

母と次男夫婦は長野に避難民暮らし

山河は残れど

父母とはらから同胞守った家が無く

故郷は父眠る先祖伝来の墳墓のみとなる

麻痺持つ身なれどいつの日か帰郷せん、きつと帰郷せん

如何にして帰郷せんか、

懐かしの故郷へ

家無きが故に募る郷愁

塩屋崎先、薄磯地区では二百余名を流す惨事、

連日、母を訪ね預金の面倒をみてくれた信用組合行員、級友・箱崎君、塩屋崎支店守らんと支店長とただ二人店に籠り遭難す

級友・明美さんと小学生・孫娘も犠牲と、卒業五十年後初同級会で知る、嗚呼
事実に比し文字の力微力なれど、

建てん鎮霊碑・我が故郷に、いつの日か

坂本 榮



昭和二十四年二月二十二日 福島県いわき市生まれ

県立磐城高校を卒業し早稲田大学政経学部卒業後、日之出汽船、三井ホームに勤務